

バーナー： バイメルさんとは、東京の日米会話学院で出会ってから、もう 50 年の付き合いになります。あなたが当時とても熱心に日本語を勉強していた姿を思い出します。

現在はその情熱を、消滅危機にある後世に継承すべき日本伝統工芸の再生に注いでおられるわけですね。お仲間の方たちと定期的なコンテストの企画開催をしていらして、この 8 か月はとても慌ただしかったそうですが、何をしてこられたのですか？

バイメル： まずは、コンテストのテーマ、審査基準、スケジュールを決めなければなりませんでした。当初は今年の 3 月には受賞者の発表ができると考えていたのですが、結局何度も何度も発表を延期することになりました。



Japan
craft²¹

Asia
Society
Japan

募集テーマ：
日本伝統工芸を再生する

アイデアを実現するための資金
最優秀賞 500万円
プラス多種分野の専門家による特別なサポートチームの援助1年間

日本伝統工芸再生コンテスト《第1回 ロニー賞》

JAPAN TRADITIONAL CRAFT
REVITALIZATION CONTEST

バーナー： それはなぜですか？

バイメル： 申請書やコンテストのチラシを一から作り、ホームページを立ち上げて、経験豊かなプロフェッショナルな審査員を探す必要がありました。

バーナー： それは大変なお仕事でしたね。具体的にはどんなことが難しかったでしょうか。

バイメル：　そうですね。一般的なコンテストでは作品を審査しますが、私たちのコンテストの課題は、急速に衰えている日本の工芸界を本当に変える力のある最も優れたアイデアを見出すことでした。でも、500万円の資金提供と1年間のサポートチームという副賞をもってしても、応募してくれる人を探すのに苦労しました。そんなうまい話があるはずないという人や、私たちが応募者に何を求めているのか理解できない人もいました。

バーナー：　募集を始めてからの反応はいかがでしたか？

バイメル：　最初の数週間はほとんど応募がなかったので、とにかく知り合いの人たちに連絡して、情報を流してもらうことに全力を注ぎました。締め切りの2週間ほど前でもまだ20通ほどの応募しかなかったのですが、それでもこれで少なくともコンテストが続けられると安心したものでした。

バーナー：　結局どのようなようになったのですか？

バイメル：　幸いにも、最後の2週間にどんどん応募が来たのです。最終的には154通という、私たちが当初望んでいた50通よりもはるかに多い数の応募を頂きました。

バーナー：　それはさぞ安心されたことでしょう。でも、本当の仕事はそこから始まったのではないですか？



© 2021 Taishi Yokotsuka for Asia Society Japan Center & JapanCraft21

写真： 認定審査員の方々

バイメル： その通りです！優秀な認定審査員の方々が、ボランティアで全ての申請書に目を通し、50通のセミファイナリストを選んで下さいました。セミファイナリストには数ページにわたる詳細な二次審査申請書の提出をお願いしました。とにかく、審査には非常に長い時間がかかりましたが、その過程で私たちの中でもコンテストの選考基準が更に練られていき、結果的には様々な異なる分野の卓越した10名のファイナリストを選出することになりました。

バーナー： その後はどうなりましたか？

バイメル： 10人のファイナリストに、最終審査員6名との30分間の面談の準備を整えてもらう必要がありました。コンテストコーディネーターの亀井啓子さんと私で、それぞれのファイナリストと30分のリハーサルを行ったのは、すべてのファイナリストに、簡潔にわかりやすくプロジェクトのコンセプトを示してもらうためでした。

バーナー： それでも、審査員の皆さんには、選考はとても大変なことだったのですね。



© 2021 Taishi Yokotsuka for Asia Society Japan Center & JapanCraft21

写真左から： 最終審査員 秋元雄史氏（美術評論家）、齋藤正光氏（竹工芸蒐集家）、堀木エリ子氏（堀木エリ子&アソシエーツ代表）、福本潮子氏（藍染作家）、須藤玲子氏（株式会社布取締役）、堀内勉氏（アジア・ソサエティ・ジャパン・センター アート委員会共同委員長）

バイメル： そうなのです。6名の審査員には、事前に申請書を読んで提出された画像等をご覧いただき、事務局ではファイナリストの一人一人にパワーポイントプレゼンテーションを用意することにしました。プレゼンテーションは2分という短い物ですが、それを面談冒頭に見ていただくことで、審査員の方にどんなプロジェクトなのかと、ファイナリストの思いをざっと振り返っていただきました。パワーポイントでは、プロジェクトのタイトル、短くまとめたコンセプト、参考画像、プロジェクトを成功させる根拠となる本人の強み、500万円の資金の使い道など二次申請書の要点をまとめました。

バーナー： で、ようやく最後のイベントが開催されたのですね。

バイメル： 会場入りした関係者とともにオンライン配信した90分のアワードセレモニーのことですね。コンテストを共催してくれたアジア・ソサエティ・ジャパン・センターのダイレクターとスタッフは、イベント開催の多くの経験と知識があり、様々な面で大変お世話

になりました。それでも、ジャパン・クラフト 21 事務局スタッフ側では、来場者に渡すプログラムや、会場に設置するバナー、参加者全ての動きを記載した司会進行台本の作成、来場者へのお土産の準備、プレスリリース、来場者とオンライン視聴者への招待状、コロナ関連の注意事項リストなど、やることがたくさんありました。

バーナー： セレモニー当日のことを順に教えてくださいませんか？



© 2021 Taishi Yokotsuka for Asia Society Japan Center & JapanCraft21

写真： 司会前崎信也氏（京都女子大学准教授）

バイメル： まずは、アワードセレモニーのリハーサルを行いました。その後、3時間の「アドバイスマーケティング」を行い、10名のファイナリストが個別に6名の最終審査員からプロジェクトを進行させるためのアドバイスを受けました。同時進行で、今後のプロモーション用に、プロの聞き手によるインタビューと撮影を行いました。

バーナー： ロニー賞は誰が受賞しましたか？



写真左から： 彫刻家 安田侃氏、ジャパン・クラフト 21 主催 バイメル・スティーブエン、ロニー賞受賞者 堤卓也

バイメル： 堤卓也氏と共同パートナーの松山幸子氏がロニー賞を獲得しました。ファイナリスト 10 名全てにも優秀賞を授与し、ロニー賞とは別にメンバー間でのプロジェクトのための資金 500 万円を提供することを発表しました。ロニー賞受賞者も、10 名のメンバーの一員と考えています。



© 2021 Taishi Yokotsuka for Asia Society Japan Center & JapanCraft21

バーナー： バイメルさんは、メンバー同士での結びつきを作ることが大切だと考えているようですね。

バイメル： そうです。3か月に一度ずつミーティングを開催します。また、グループとしてのブランディング、日本語と英語のウェブページをそれぞれの優秀受賞者の為に作成し、これからのグループの進化に従って、サポートを追加していきます。

バーナー： 今後の予定を教えてください。

バイメル： 来月には、堤さんと松山さんと話し合いながら、今後のサポートチーム作りを始めます。9月中旬にはサポートチームとの第一回ミーティングを持ち、資金の提供を始めたいと思っています。

バーナー： ロニー受賞者のプロジェクトについて教えてください。

バイメル： 堤さんのプロジェクトは、森林再生、工芸に関わる人々の誘致を含めた地域活性化、木工職人の雇用と連携などを通じて、京都京北で木工と漆文化の再構築をすることです。コンテストのテーマは21世紀に工芸を再生させることでした。この2人は様々な視点

から工芸を再生しようとしています。指物に使われる桐をはじめとした様々な種類の樹木を植栽、地元の地域再生、美しい漆塗りの食器の生産に加えて、堤さんは既に漆塗りのサーフボードという新しい分野に進出をしています。サーフボードに漆を塗布すると、見た目が良くなるだけでなく、ボードの滑るスピードが上がるのです。

今後は、優秀賞受賞者 10 名の皆さんと話し合いを持ち、どのように JC21 がこれから 1 年間サポートできるが詰めていきます。



バーナー： 今後のコンテストはどのような予定ですか？

バイメル： 2022 年初旬から次のコンテストを開催する予定です。第一回のコンテストは初めての事ばかりで準備が大変でしたが、次からは再利用できる資料なども多いので、ずっと簡単にできるはずです。

バーナー： では、やっと少し休息が取れますか？

バイメル： いえいえ。まだまだやることがたくさんあります。ホームページをもっと使いやすくなるように作り直さなければなりませんし、NPOとして登録し、会員を増やさなければなりません。第一回目のコンテストは無事成功しましたが、まだ私たちは国内で知られた存在ではありませんので、広告宣伝にも力を入れなければなりません。若い大工、左官、庭師などを対象とした伝統的建築塾への援助も続けてきます。

2018年の1月にジャパン・クラフト21を立ち上げて以来、試行錯誤を繰り返し、袋小路に迷い込んだと思うこともありました。2020年11月に6名の現役大工が心町家塾を卒業し、7月6日のアワードセレモニーを終えた今、ようやく変化をもたらす何かが始まったと感じています。援助してくれている皆さま、ボランティアや応援してくださっている方々に感謝しています。今後、日本伝統工芸の黄金時代の到来を共にも変えましょう！